



清水義久さんはパーキンソン病のため、ご自宅で奥様とお子様たちの看護を受けておられましたが、年明けに病状が急に悪化し2010年1月4日にご逝去になりました。(享年66歳)

1980年代CIFジャパン発足のときから、事務局運営に尽力してくださったほか、アジア社会福祉従事者研修参加者のホームステイ受け入れなど、国際交流にご家族中で協力してくださいました。中央共同募金会に長らく勤務され、同会事務局の重鎮でいらっしゃいましたので、お葬儀には職員や関係者の方々が大量参列されました。奥様にお悔やみを申し上げる機会をいただきましたが、そのおりにCIFジャパンの皆様にも会いがたい旨伺いましたのでお知らせいたします。ご遺族の皆様への慰めと平安をお祈りいたします。(浅野記)

清水義久君を偲んで

小池嘉夫

1964年クリーブランド

1967年の夏、清水君と私は信州・八ヶ岳の主峰「赤岳」の山頂に立っていました。そこで撮った写真の中の彼は白面の好青年で笑顔から零れている白い歯並みがとても爽やかです。当時氏は弱冠というか初々しい25才で勿論のこと独身。慶応大学経済学部の卒業生で在学中には専らシャンソン同好会で歌っていたという自慢の喉を昼休みの時などに披露し、とにかく格好よかったから、中央共同募金会が入館していた社会事業会館内の数多の事務所で働いていた独身女性たちの憧れの的でした。そうした方々をしり目にいち早くしかもまことに密かに同僚の女性と婚約し、1976年に結婚されたのでした。

清水君は70年代に入って間もなくCIPヘトライするようになり断続的に3度挑戦した後とうとう1977年にクリーブランド・プログラムへの参加を果たしたのです。目標に向かって不倒不屈の精神で臨む態度には重厚感があり私は敬服し

ておりました。CIPにおける実務の研修先はクリーブランド共同募金会だったためにいろいろと有益な経験を積むことができました。そして帰国後はアメリカ仕込みの流儀で募金奉仕者の組織育成に務める傍ら隔年ごとに開催される「国際共同募金会議」の準備のため United Way of America (全米共同募金会)のスタッフと連繋して企画調整の作業を進めておりました。通信技術にまだそれほど進化がなく事務的にも Fax や Internet の導入前のことでしたから、相互の意思疎通は大変にご苦労のことだったはずですが。

清水君はまた全米共同募金会が発行する定期刊行物の主要な記事を翻訳し都道府県共同募金会へ参考資料として提供してもおりました。共同募金会では5年程度の間隔で専門有識者を招いて特別委員会を立ち上げ、当面の運動の強化改善策の立案を行なっておりましたが、その事務方として委員諸氏をリードしてもおられたはずですが。最近、政治とカネ・違法もどきの献金に関わった政治家が盛んに『寄付の文化』を口にするのを聞きますが、これは事務局が起草した特別委員会の答申書の中で使われたのが最初だったそうです。その用語を特別委員のお一人で当時「読売新聞」の論説委員だった小谷氏が自社の論説で使用しました。また、小谷氏はこの用語をサブタイトルにした社会時評も書いています。さらに、この年

は募金の開始に先だって行なわれた厚生省記者クラブでのブリーフィングでも頻繁に使用・説明されたので、この年の新聞に書かれた共同募金の解説記事にはこのフレーズが多用されていたとのことです。

この様な舞台装置づくりの背景に清水義久君がおり彼の努力があったのです。清水君はこの他にも各種の翻訳資料を中心に纏めた『寄付の文化～日・米・英の比較』というミニ論文を發表しております。

1997年、当時のCIFJapanの執行部から会を解散したい、という提案が行なわれました。侃々諤々の議論の末に管財人に私を据えてしばらく様子を見ながら再興のチャンスを探ろう、という結論になりました。執行部の結論に同意するという委任状の提出が多かった反面、会を存続すべしとの声に支援されて募集した有志者の中に清水義久君がいました。清水君は会計を担当して下さり、会費の複数年未納会員、当該年までの納入者、将来年度に至るまで会費前納の会員と克明に仕分けした会計報告を作成してくれました。郵便振替の登録局を神奈川県沢渡局から千葉県松戸局に移転させるという厄介な仕事もやってのけてくれました。年度ごとの予算案・決算案の作成、会計監査のための証憑の整理などと細々とした雑務を嫌がらずにやってくれました。最も大きな貢献は最大時で75人に及ぶ会員の会費管理をして下さったことでした。こうした陰でのご尽力を会計担当を交代する2007年まで続けて下さったのです。ことに後年は持病のパーキンソン病が進行していたので、とても苦しんでおられ会計の辞任方を文書で申し出てこられたことがありました。その申し出に承知しましたと

返信しながら後任者探しに手間どってしまい、結局、私が事務取扱い中は引き続いてお世話頂くことになってしまいました。そのことは誠に申し訳ない気持ちでいっぱいです。

思えば清水君は早すぎました。本当に駆け抜けるように早々と逝ってしまいました。中央共同募金会では清水君と面識がないスタッフも含めて大勢の方が葬儀に参列されたそうで、正に清水君の人となりを行彷彿させるものだと思っております。CIF Japanからは浅野純江さん、梶村慎吾さんが通夜に出席され喪主である奥様をお慰めになりました。私は近くにおりながら体調低下に加えて喘息の発作が重なって歩くこともできず、通夜も告別式も欠席を余儀なくされ正に断腸の思いでした。僅かに電報によって弔意を伝えるだけでした。その一節を抜粋します。

「清水義久君を送る（弔電の一部）」

義久さん いよいよ旅立ちですね。
雄々しく歩みましょう
この道は栄光へと続く道なのでですから……
たといそうでないとしても
虞れなくてもよいのです
なぜなら、そんなことは起こらないのですから
さあ、あなたが遺された
愛しい人たちのために祈りましょう
あなたは天上から私は地上から
義久さん！
私は“さようなら”はいいません なぜなら
遠からず、また私たちは会えるのですから
さあ、義久さん旅立ちの時です
雄々しく発ちましょう、義久さん

合掌

